

令和2年7月

文



月

あ お ぞ ら

鹿屋市青少年育成センター

第353号

鹿屋市共栄町20-1 TEL 31-1138
(鹿屋市教育委員会 生涯学習課)

「日々の生活に潤いと夢を与えてくれた



本たち、先生たち、そして仲間たち」

毎日、幼稚園に通うのが楽しみだった。幼稚園に着くと、担任の淀川先生が絵本や紙芝居を読んでもくれた。「グッドバイ、グッドバイ、グッドバイ、バイ・・・」とみんなで歌うお帰りの時間までに何冊か読んでくれた。本当に楽しかった。そんな淀川先生のことを僕らは大好きだった。おばあちゃんみたいにとっても優しく、なんでも「はい、はい。」と受け入れてくれた。そして、僕らにいろんなことを教えてくれた。神様みたいだった。

運動会の日、どうしても1番を取りたかった私は、ピストルの「ドン」という音と同時に決行した。ゆっくりと逆走して、先頭が近づいてくると回れ右をしてゴール。目標達成！母にはこっぴどく怒られたが、淀川先生は叱らなかった。いつものようにお帰りの時間に絵本を読んでもくれた。

小学校入学後、4年担任の先生以外は読み語りをしてくれなかった。学校図書館にはいつも怖い司書の先生がいた。本当につまんなかった。

中学2年の時、仲良し5人組ができた。他の学校から来た4人に私。仲間は、毎週土曜日に「天ぶら（天文館をぶらぶらすること）」へ誘ってくれた。1週間分の文庫本を買うのだ。この時、川端康成さんに出会った。素晴らしい方だった。運命的な出会いもあった。壺井栄さんとの出会いだ。彼女の『二十四の瞳』は私の人生を変えた。岬の分教場で教える大石先生みたいになりたい！教師になりたい！その思いがずっと続いた。

今も校長室の机の引き出しには「教育実習日誌」と壺井栄さんの『二十四の瞳』がある。辛いときに取り出して見ている。宝物である。

高校時代は、全くと言っていいほど本は読まなかった。部活と宿題の日々。

大学では運よく箱根駅伝で何度も優勝している陸上部合宿所に入れた。地獄の日々だったが、充実していた。大学3年の時、監督にお願いして本

鹿屋市立東原小学校 校長 福井 久善

練習の後、バイエルを片手にピアノ教室へ通った。大石先生のようになるためだ。

私の学年はマネージャーを含めてたった6人。とても仲が良かった。今でも連絡を取り合っている。そんな仲間の1人（彼は関東インカレも箱根駅伝も全日本駅伝も出走している。私は補欠にも入れなかった。）が、ある日、「福井、先生になるんだろ。これいいぞ。」と渡してくれたのが、吉岡たすくさんの『小さいサムライたち』シリーズの本だった。私の夢を気にかけてくれていたのだ。うれしかった。それから毎月、吉岡さんに会いに本屋へ出かけた。大石先生のような先生になるために。

県外の合宿に行く時は、仲間はそれぞれに好きな本を何冊か持って行った。合宿は大抵、三部練（早朝、午前、午後）だったが、練習の合間には、好きな本のことや将来の夢について語り合ったものだ。

結婚後、お腹に赤ちゃんができて9か月頃から毎晩のように、お腹に向かって読み語りをした。読み語りは、娘が中3まで続いた。今は、娘から「この本は面白いよ。」といろんな本を勧められる。

今、振り返ってみると、私の人生において、様々な人とのかわりかは、「親と子の20分間読書」そのものだったように思う。「親」が先生だったり、物語の主人公だったり、多くの仲間たちだったり、私自身だったり・・・。

今、着ているジャケットの中にあるのは、妻からもらった山口路子さんの『オードリー・ヘップバーンの言葉』だ。

これまで、日々の生活に潤いと夢を与えてくれた本たち、先生たち、そして仲間たちに感謝の気持ちでいっぱいだ。

